

# 現代青年の友人関係とふれ合い恐怖的心性 再考

岡田 努  
(金沢大学 人文学類)

## 目 的

現代の青年の友人関係の特徴として、互いに傷つけ合うことを避け、円滑な関わりを維持することにエネルギーを消耗しているという指摘がしばしばされている。岡田(2007)は、傷つけ合うことを回避しながら円滑な関係を指向する青年群は、他者の評価に過敏であるといった過敏型自己愛(Gabbard,1994)の特徴を持つことを見出している。

一方、表面的な関係はうまくこなせるものの、関係が深まる場面を避けてしまうといった特徴を持つ「ふれ合い恐怖」もまた現代青年の友人関係の特徴と類似していると考えられる。岡田(2002)では、ふれ合い恐怖的な心性のうち、「対人退却」傾向が顕著に見られる青年は、他者の目から予め退却し不安を防衛していると考えられ、また円滑な関係への指向性は見られなかった。こうしたことから、ふれ合い恐怖の心性は、過敏型自己愛とは異なると考えられた。福井(2007)は、ふれ合い恐怖傾向が高い者は、自分が特別優れていて他者と同列に扱われたくないという高い自負心と、孤高を保つために他者との関わりを避ける傾向があることを見出している。このように「対人退却」には、自己愛の誇大性が傷つくことを防衛する意味あいがあるとも考えられる。一方、岡田(2002)では「対人退却」とは別に、「関係調整不全」下位構造も見出されていた。この下位尺度は臨床群との差が見られないことから妥当性が疑われたが、臨床的な問題には至らない一般的な青年に見られる心性という点では検討の余地があると考えられる。

本研究では、こうしたふれ合い恐怖の各側面と、傷つけ合うことを避ける友人関係、自己愛の関係について探索的に検討する。

## 方 法

調査対象者 首都圏、甲信越、近畿圏、北陸の4年制大学生1～4年生(不明 1).有効回答数 506 名(男子 227 名, 女子 279 名 18～25 歳)

尺度 1) 友人関係で傷つけ合うことを避ける傾向についての尺度(以下「傷つけ尺度」と略称) 岡田(2009 教心総会)で作成された尺度。「傷つけられ回避」「距離確保」「礼儀」「傷つけ回避」の各下位尺度からなる。本研究ではこのうち「礼儀」を除く3つの下位尺度を用いた。

2) ふれ合い恐怖尺度 岡田(2002)において作成された尺度で、「対人退却」「関係調整不全」の2つの下位尺度から成る。

3) 自己愛についての尺度: 中山・中谷(2006)の評価過敏性-誇大性自己愛尺度および、上地・宮下(2009) 自己愛的脆弱性尺度短縮版を用いた。過敏性-誇大性自己愛尺度は、誇大性」「評価過敏性」の2つの下位尺度からなる。また自己愛的脆弱性尺度短縮版は自己顕示抑制、自己緩和不全潜在的特権意識、承認・賞賛過敏性の4つの下位尺度からなる。

## 結果と考察

Table 1 に友人関係、自己愛とふれ合い恐怖との相関を示す。なお、ふれ合い恐怖尺度の対人退却と関係調整不全の間の相関は  $r=.517$  と比較的高かったため、それぞれの影響を統制した偏相関係数を求めた(なお評価過敏性と誇大性の間の相関は.01 ときわめて小さかった)。友人関係との関連を見ると、ふれ合い恐怖のうち「関係調整不全」は「傷つけられ回避」「傷つけ回避」との関連が見られた。「対人退却」は友人関係の「距離確保」との相関が見られたが、「傷つけ回避」「傷つけられ回避」とは僅かな負の相関関係が見られたに過ぎなかった。このことから「関係調整不全」が高い者は、傷つけ合わないことで関係を維持しようと努めていると考えられる。一方、「対人退却」が高い者はそうした対人的配慮を放棄し、相手から距離を置いていると考えられる。

Table 1 友人関係・自己愛とふれ合い恐怖の相関

	関係調整不全	対人退却
傷つけられ回避	.303**(.309**)	.075 (-.100*)
距離確保	.252**(.069)	.383**(.305**)
傷つけ回避	.157**(.190**)	-.011 (-.109*)
評価過敏性-誇大性自己愛尺度		
評価過敏性	.518**(.472**)	.244**(-.032)
誇大性	-.101*(-.144**)	.043 (.112*)
自己愛的脆弱性尺度短縮版		
自己顕示抑制	.315**(.267**)	.177**(.011)
自己緩和不全	.048(.235**)	-.273**(-.356**)
潜在的特権意識	.331**(.266**)	.211**(.054)

( )内: ふれ合い恐怖得点の他方を統制した偏相関係数

評価過敏性-誇大性自己愛尺度との関係では、「関係調整不全」は「評価過敏性」と相関が見られたが、「対人退却」と「誇大性」との間には弱い関連しか見られなかった。一方自己愛的脆弱性尺度短縮版との関係でも、「関係調整不全」を統制した場合、潜在的特権意識と対人退却の間では無相関となり、やはり誇大的な自己愛の特性と対人退却の間には関連が見られなかった。

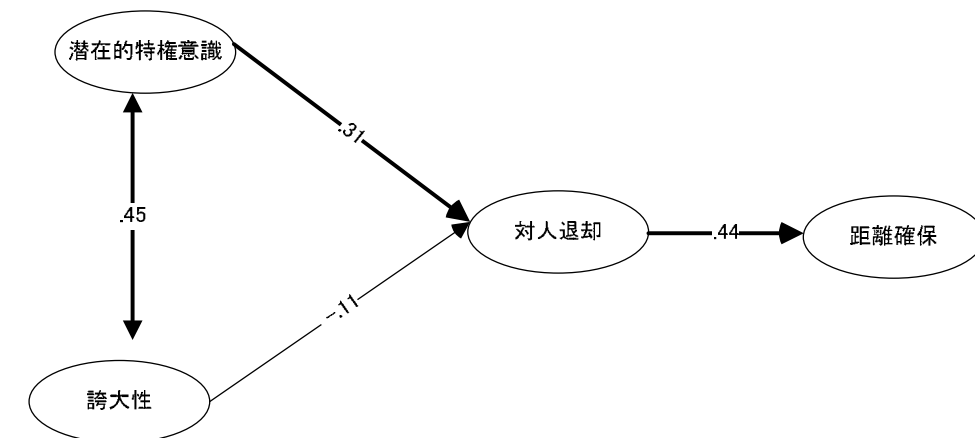


Figure 1 誇大的自己愛から対人退却、友人関係に至るモデル

2

しかし、誇大的自己愛に関連する「潜在的特権意識」「誇大性」それぞれの下位尺度とふれ合い恐怖の「対人退却」下位尺度および友人関係の「距離確保」の間で Figure1 のようなモデルを作成したところ、「潜在的特権意識」からは正のパスがみられ、一方「誇大性」からは弱い負のパスが見られた(項目得点を観測変数に投入, RMSEA=062, CFI=.856 各因子へのパスが低かった誇大性の'自分の体を人に自慢したい'及び対人退却の'一人で趣味に没頭していたい'を計算から除外)。このことから、現実の自分がすばらしい存在であると認識するような顕在的な誇大的自己愛から直接的にふれ合い恐怖が生じるのではなく、本来自分が認められて然るべき(それが報いられていない)という意識から退却的な態度が生じ、友人との間で距離を置くような関係のあり方に繋がるという構造が示唆された。

本研究は科学研究費基盤(C)現代青年の友人関係・自己のありかたと社会適応に関する研究課題番号 20530589 の研究の一部である